

概要

- 県では、「第3期みやぎ食と農の県民条例基本計画」に基づき、園芸産出額の倍増を目指して、水田転作田や基盤整備に伴う集約農地などを活用した**土地利用型園芸品目の新たな栽培の取組み**や**既存産地の拡充**を図っている。
- しかし、栽培の定着には、地域ごとに課題があり、生産技術の確立が急務となっていることから、栽培状況の課題や改善策についての情報共有を行い、課題解決に向けた取組みが必要である。
- 土地利用型園芸品目のばれいしょ、たまねぎ、さつまいもでの生産性向上へ向けた栽培技術の課題整理、病害虫対策や雑草防除の次作の新たな取組みの計画作成支援を行った。

具体的な成果

1 支援対象数

- 令和6年度 広域ばれいしょ部会、広域たまねぎ部会、広域さつまいも部会

2 取組実績

[ばれいしょ]

■ 反収の高い生産者のほ場は排水性が高いことを生産者に情報提供することで、排水対策の重要性が理解され、次作の排水対策での表面排水の徹底（二重明渠の設置）により、目標反収を達成した生産者が増加した。

また、栽培後半の疫病拡大を防ぐために、気象データから適期防除のタイミングを解析し、萌芽後10日を目安に予防散布開始することを励行した。その結果、次作で適期に予防防除を実施した生産者は目標反収を達成することができた。

[たまねぎ]

■ 各地域でべと病による減収が問題となったことから、べと病の罹病リスク回避のため、播種後生育期間の日平均気温データを分析し、年内防除の必要性を明らかにした。その結果、生産者の理解のもと、年内防除、一次感染株の抜き取り、春先の防除が追加され、次作の防除計画が見直された。

また、雑草防除では、除草剤の散布遅れによる雑草対策に苦慮していたため、雑草防除計画の見直しを図られた。

[さつまいも]

■ さつまいもの大規模作付法人の収穫作業の省力化のため、R7に生分解性マルチの検証を行うこととした。

普及指導員の活動

令和6年度

- 各品目の収量向上へ向けて課題整理を行い、病害対策、排水対策及び雑草対策の重要性を生産者へ周知した。
- 気象データを用いて病害対策の適期を解析し、研修会で生産者へ情報提供を行った。
- 関係機関と連携し、次作の病害、雑草防除計画の見直し支援を行った。



普及指導員だからできたこと

- 試験研究事例や他県の技術の情報収集を行うことで**地域の課題を明らかにし、排水、病害及び雑草対策に対応することができた。**
- 地域の実情を知る普及指導員が関係機関と連携し、対象者と調整することで、**生産性向上へ向けた新たな取組みの計画作成を進めることができた。**

土地利用型園芸品目の定着に向けた 要因解析による生産性向上

活動期間：令和6年度

1. 取組の背景

県では、「第3期みやぎ食と農の県民条例基本計画」に基づき、園芸産出額の倍増を目指して、水田転作田や基盤整備に伴う集約農地などを活用した土地利用型園芸品目の新たな栽培の取組みや既存産地の拡充を図っている。

しかし、地域ごとに生産から出荷までの間に様々な課題があり、また栽培の定着には生産技術の確立が急務となっていることから、各地域の栽培状況の課題や改善策についての情報共有を行い、課題解決に向けた取組みが必要である。

2. 活動内容（詳細）

○土地利用型園芸品目（ばれいしょ、たまねぎ、さつまいも）の生産性向上へ向けた新たな取組みの計画作成支援

じゃがいも、たまねぎ、さつまいも生産における各課題を整理するとともに、生産性向上へ向けた新たな取組み計画の作成について検討を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

○土地利用型園芸品目（ばれいしょ、たまねぎ、さつまいも）の生産性向上へ向けた新たな取組みの計画作成支援

ばれいしょでは、反収が高い生産者のほ場は排水性が高く、雑草病虫害防除の適期管理を実施していること明らかになったため、生産者へ情報提供し、改善を促した。

栽培後半の疫病拡大を防ぐために、気象データから疫病感染好適指数を算出して適期防除のタイミングを解析し、生産者に対して萌芽後10日を目安に予防散布開始することを励行した。その結果、次作で適期に予防防除を実施した生産者は目標反収を達成することができた。

また、排水対策による表面排水の徹底（二重明渠の設置）により、目標反収を達成した生産者が増加した。

たまねぎでは、べと病による減収が各地でみられたことから、べと病の防除体系の見直しのため、べと病の罹病リスクがある播種後生育期間の日平均気温データを解析し、生産者に情報提供したことで、年内防除、一次感染株の抜き取り、春先の防除が防除計画に追加された。また、べと病に感染した場合に適切に残渣処理を行う必要性について生産者の理解が醸成された。

また、雑草防除では、除草剤の散布遅れにより雑草が繁茂するほ場が増えていることから、雑草防除計画の見直しが図られた。

さつまいもでは、大規模作付法人の収穫作業の省力化のため、R7に生分解性マルチの検証を行うこととした。

4. 農家等からの評価・コメント

気象データとたまねぎべと病の発生リスクを合わせた資料から、令和6年度にべと病が激発した理由が納得でき、対策が必須であると感じた。令和7年産の栽培では、年内防除、一次感染株の抜き取り、春先の防除を追加し、対策に取り組んでいきたい。（法人A）

タイムリーな指導と情報提供を受け、各生産者の基本的な栽培技術は着実に身につけてきていると感じている。今後は基本技術の実践を意識することで収量・品質の向上につなげたいと考えており、引き続き指導をお願いしたい。（B 農業協同組合たまねぎ部会部会長）

5. 普及指導員のコメント（農業振興課 農業革新支援専門員）

今回の活動により、各品目の課題が明らかになり、排水対策や病害対策等へ向けて生産者の意欲が向上した。引き続き、関係機関と連携して、さらなる作付けの拡大、栽培技術向上へつながることを期待している。

6. 現状・今後の展開等

今後は、それぞれの品目について新たな栽培計画のもと収量向上へ繋げ、引き続き、関係機関と連携して各地域との情報共有を行いながら、課題解決に取り組み、生産拡大支援を図っていく。



(研修会の様子)



(現地検討会の様子)